

---

# 黄巾の旗は二度翻る

砕け散る檸檬果汁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄巾の旗は二度翻る

### 【Nコード】

N7245X

### 【作者名】

砕け散る檸檬果汁

### 【あらすじ】

後漢末期。黄巾党による反乱は後の世に名を連ねる英雄たちの手によって失敗に終わった。男は現実から目を反らすため再び立ち上がる。その果てにあるのは復讐か破滅なのか、それとも平穏なのか……

## プロローグ ある男の末路

辺りは血の臭いで充満しており、口の中では砂と血の味が混ざり合い、土と鉄の味がする。

辛うじて映る視界には永遠に続くかと思われるような死体の草原が広がっており、所々では火の手も上がり、たとえ誰かがこの場所を地獄と言ったとしても誰も疑わないだろう。

このような場所で地面に伏しながらも辛うじて意識を保っていた、この男は不幸なのかもしれない。

ほんの数刻前まで黄色に染まっていた大地は今や変わり果て、赤一色となっていた。

男の倒れている地面も例外なく赤く染まっており、その色の持ち主が男のモノなのかは本人にすら分からない。

ただひとつ分かることは、程なくしてこの男も周りに転がる肉塊と変わらなくなるだろうということぐらいだった。

それでも男は死を嘆くわけでもなく、ましてや悲しむわけでもなかった。

ただただ憤懣で溢れていた。

なぜ自分は死んでしまうのか、誰のせいで死んでしまうのか。

原因を作った者を恨み、仕向けた者に怒り、殺した奴らを憎む。

そして……このような一片の救いすら無い最後を迎える自分に絶望した。

その時、視界の隅で何かが動いていた。

陽の光が作り出した二本の長い影が男の顔に被さる。

二人の人物はどうやら話しているらしく声らしきものは聞こえるのだが内容までは分からないが、声からして男であることは予測でき

た。

辛うじて見える限りの状況から推測して二人は地面に転がっている死体を一つずつ何やら確かめているらしい。

どうせ、せこい盗賊が死体の身ぐるみでも剥ぎにきたのだらうかと思っっていると、どうやら男の番がきたらしく声の主と思わしき人物達が男の傍らに佇んでいた。

そのうち片方は年端も行かない少年の姿をしており、もう一人の男は線の細い体をしており神経質そうな目つきをした眼鏡をかけた男だった。

傍らに佇む二人はなんとも奇抜な格好をしており、そのあたりの盗賊とは思えなかった。

「しかし死体を弄繰り回すとは相変わらず悪趣味なやつだな」

「そのように嫌そうな顔をするのならば別について来なくても良いのですよ?」

「お前を放っておくと何を為出かすか分からないからな」

「左慈さんには言われたくないですが……でも残念ながら今回は死体を弄らなくてもよさそうですよ」

眼鏡の男は口角をニツと上げると地面に倒れ伏している男を見た。

「今日この日に私たちが生きて出会えたことは、なんと幸運なことなのでしょうね」

眼鏡の男は芝居がかった大仰な言葉を吐くと男に手を差し出す。

「このような地獄を作った者達に復讐をしましょう。奴らに同じ地

獄を味合わせてあげましょう。そのための手助けを私が致しまし  
う」

眼鏡の男は慈悲深い笑みを浮かべながら地面に倒れ伏す男を物の値  
踏みをするような目で見つめる。

その姿はか弱い子供を攫おうと手を伸ばす鬼のように男の目には映  
った。

だが、男は一瞬の躊躇すらなく眼鏡の男の手を掴んだ。

ただ一時でもこの地獄から目を反らすことができるのであればと願  
いながら。

「ふふ、私を楽しませてくださいよ」

楽しそうに笑う眼鏡の男とは対照的に左慈と呼ばれた少年は、いか  
にも面倒臭そうな顔をしている。

だが、そんな様子など気にもしないのか眼鏡の男は一頻り笑うと男  
を軽々と担ぐと、地獄に一陣の風が吹いた。

砂埃を空に巻き上げながら突風は血の匂いと生者をどこかへと連れ  
ていった。

突風が止んだとき地獄からは一人残さず生者は消え去った。

## プロローグ ある男の末路（後書き）

初めての小説ということまで至らない部分も多くありますが、どうかよろしくお願いします。

基本は2週間に1話ぐらいのペースでかけたらいいなと思っていきます。

誤字脱字などを発見して下さいましたら報告などをしていただけると嬉しいです。

## 第1話 張角再誕

男は重いまぶたを擦りながら目を覚ました。

僅かな視界に入るのはお世辞にもキレイとは言えないくすんだ白色の天井だった。

寢床から起き上がり部屋の中を見渡すが、ここがどこなのかは男にはさっぱり分からないが、幸い部屋にも窓があったので外を見てみると建物が通りに面しており、道の端では頭に鉢巻を巻いた商売人らしき男が声を張り上げて通行人に商品を薦めていた。

眼下に広がる平和な街の様子は目を閉じれば鮮明に蘇る先ほどまでの地獄を男に夢ではないのかと惑わすには十分であった。

男は確かに瀕死の重傷を負っていたはずだった。それが目を覚ましてみれば知らない街の宿におり、体には傷の跡すら見つからないのだ。

だから、あれは悪い夢に違いないのだと男は重たかったのだが、その時不意に開いた部屋の扉から入ってくる人物を見た時、あれは夢ではないのだと確信してしまった。

「おや、ようやく目を覚ましましたか」

「……………」

「体はどこか痛みますか？」

「……………」

眼鏡の男は何一つ反応を返さない男に優しく問いかける。  
喉は渴いてないかと、お腹は空いてないかと。

男は喉も渴いているし、腹も減っている。

だが、そのようなことよりも別の思考が頭の中を埋め尽くしていた。目の前のこいつは誰なのだと、なぜ自分を助けたのだと。

聞けば目の前の眼鏡の男は質問に丁寧な答えてくれることだろう。だが、頭のどこかで何も聞くな、無視をしろとけと警鐘を鳴らしていた。

目の前の男と言葉を交わした瞬間に、この先に人生のすべてが男のモノになってしまふ気がした。

それでも男は知らぬうちに口を開いていた。

「……あんたは誰なんだ？　なぜ自分を助けた？」

眼鏡の男は反応が帰ってきたことが嬉しいのか口角を上げ男に笑いかけながら嬉々と話しだした。

「貴方が選ばれたからですよ。あの地獄で貴方は幸運にも私と生きて出会うことができた。まさに運命というほか無いでしょう。ですから貴方を助けたのです」

眼鏡の男は一息にそう言うのと傍らの卓に置いてあった瓶を手に取りと椀に水を注ぎ、男に差し出した。

男が椀を受け取るのをためらっていると眼鏡の男は一気に椀の中の水を飲み干した。

「安心して下さい。毒など入っていませんよ」

そう言うと眼鏡の男は再び椀に並々と水を注ぎ男に手渡した。

男は喉が渴いていたせいもあるのか一息に椀の水を飲み干してしまつた。



「もう一杯要りますか？」

「遠慮させてもらおう」

男はそう言つと身を正し再び眼鏡の男に向き直つた。

「それよりも助けていただいたこと感謝いたす」

「礼には及びませんよ」

「そうか、命を助けてもらつて礼の一つもできないとは情けない」

「厚意というものは素直に受け取っておくほうがよろしい時もございますよ」

「うむ……ところであなたのことはなんと呼べばいいのだろうか？」

「ああ、自己紹介がまだでしたな、私のことは気軽に于吉と呼んでいただければ」

「于吉殿か……。服装などを見るかぎり道士と見たが」

「あなたが間違つてはいませんが、あなた達がもつとわかりやいように説明すると天の御使いと言う方が近いでしょうな」

男はこの言葉を聞いた瞬間に于吉という男がより一層きな臭く感じた。

確かに眼の前の于吉という男は如何にもな服装をしている。しかし、服装などその気になれば誰にでも真似することができる。

男は言っていることが本当かどうか顔を凝視するが、于吉は緊張も

何も感じないのか涼しそうな顔をして男の顔を見ながら平然と腕に水を注ぎ飲んでいた。

「信じていない様子ですね」

于吉はそう言うつと懐から短剣を取り出し鞘から短剣を抜いた。

「少し痛いですが、一瞬ですので我慢してくださいね」

于吉は男の腕を無理やり掴むと短剣を男の腕へと振り下ろした。その瞬間、男の腕に激痛が走った。それもそうだ、男の腕には深々と短剣が突き立てられているのだから痛くないはずがない。

男は言葉にならない叫びを上げるが于吉は気にする用などなく素早く腕から短剣を抜き取ると腕から指の先をつたり真つ赤な鮮血が床へと数滴落ち小さな血溜まりを作る。

その次に符のようなものを再び懐から取り出すと男の傷口へと貼りつけ、于吉が呪文らしきもの呟き、符を再び傷口から外すと、傷など元からなかったかのように綺麗に傷口が消え去っていた。

「これで信じてもらえたでしょうか？」

于吉はそう言うつと血の付いた短剣を拭い鞘に収め懐へと仕舞った。床には消えた傷口とは違い、まだ暖かい血溜まりが残っていた。

「……………」

「この程度は私にとっては造作もありませんので、あまり驚かれても困るのですがね」

「……………于吉殿が天の御遣いということとは信じよう。たしかにこのよ

うな芸当が人にできるはずがあるまい」

男はそう言いながらも未だに目の前の出来事が信じられないのか呆けていた。

「さて、本題に入りたいと思うのですが宜しいですか？」

男は于吉に話しかけられようやく思考が頭に戻ってきた。

その戻ってきた思考で本題とやらどのようなものか考えを巡らす  
答えはでない。

もしかしたら気が変わり礼を要求されるのではないかとも思ったが、  
あのような力がある目の前の男がこのように小さなことにこだわる  
はずもない。

「……本題とは？」

「簡単なことです。貴方はこれから何をしたいですか？」

最初、于吉の言いたい意味がわからなかった。

何をしたい？ 男はしばらく考えを巡らす  
が答えらしき答えはでない。  
い。

そのようなことを言われても天に何も願ったことすら無いのだ。

それに男はただただ生きていることが、この上なく素晴らしいことに  
感じられていた。

「……何も無いが」

男はこの答えに于吉が何かしらの答えを期待していたのならば、さ  
ぞかし男に失望するだろうと思っていたのだが于吉は答えに満足し  
たのか大きく一回うなづく  
と懐から一冊の書物を取り出した。

「それならば、これを差し上げましょう。もし、貴方にやりたいことができたときに役立つことでしょう」

于吉は卓の上に書物を置くと再び男の顔を見た。

「少々厚かましい気も致しますが、やはり礼をもらっても宜しいでしょうか？」

男はやはり来たかと心のなかで思った。

この時勢に赤の他人に無償で施す者などいる筈がない。

「自分ができることでもいいのならば」

「それならばお言葉に甘えまして、今日から貴方には張角と名乗っていただきたいと思えます」

「……………」

「何が不満でもございますかな？」

不満がないわけが無い。

誰が好んでそのような名を名乗るといふのだろうか。

だが、男は文句をいう事も断る事もしない。

恩ももちろん感じているが、目の前の男の力があれば断った瞬間にでも殺されないと限らない。そのような考えが頭に湧いた時点で男から拒否という選択肢は消えていたのだ。

「……………わかった」

「では、私は用事がありますので、またいつかお会い致しましょう」

于吉はそう言うと、部屋に来た時と同様に唐突に部屋を出ていった。

男はその様子を見送ると寝台の上に勢い良く寝そべる。寝台がギシギシという音を立てて軋むが男の頭の中は于吉という男のことではないだった。

それなりに話した気もするが、于吉という名前以外は何一つ分からなかった。

あの男は自分を助けたことは運命だとか言っているが、あの地獄で見た奴の目は忘れることは出来なかった。必ずや別の目的がある気がするのだ。

男はそうようなことを考えながらも于吉の置いていった書物が、どのようなものかと気になり卓の上を見ると、卓の上には書物の他に綺麗な布で作られた袋のようなものが置かれていた。

男は書物よりも袋の方が気になり手に取るとずっしりとした重さが手に伝わってきた。

袋の口の紐を解き中を見てみると、男が今まで手にしたことのないような量の銭が入っていた。

于吉の忘れ物かと思い再び袋の口を紐で縛ると男は机の上に袋を置いた。

これほどの大金ならば、すぐにでも戻ってくるだろうと思っていたのだが、その日のうちに于吉が再び男の元を訪れることはなかった。

## 第1話 張角再誕（後書き）

今のところ忙しくなる予定もありませんので2週間以内に第2話を描き上げて投稿したいところです。

誤字や脱字の発見をして下さいましたら報告していただくと嬉しいです。

感想などもいただくと嬉しいです。もちろん改善すべき点などがありましたらご意見ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7245x/>

---

黄巾の旗は二度翻る

2011年10月21日08時13分発行